



写真上：朱円に建立されている「斜里農業発祥の地」の記念碑。

写真中央：今回、交わされた協定書。住田町産のスギ材でつくられたオリジナルの協定書。

写真下：スギとイチョウの木でつくられたチェーンソーアート（チェーンソーだけで彫られた作品）が住田町から贈られた。住田町の団体「杣遊会（そまゆうかい）」が製作したもので「福が来る・フクロウ」と住田町のまちの鳥である「ヤマドリ」がかたどられている。

住田町と斜里町の関係のはじまりは、明治時代までさかのぼります。明治10年に、斜里で最初に鋤をおろしたのが住田町出身の鈴木養太氏といわれています。当時、うっそうとした原生林と湿地が広がる中、農業に適する地を朱円に見つけ、開墾に着手しました。これが斜里の農業のはじまりといわれていることから、鈴木氏は「農業開拓の祖」とされています。

「災害時における相互応援に関する協定」は災害が発生し、独自の町では十分に被災者や被災地の救援、心身回復ができない場合に相互に応援することを定めています。

「東日本大震災で近隣の市町村だけではなく、広域で連携し合うことの大切さを実感した。『力強い友人』ができたとして捉えていただけたらと思う。まずは災害時に助け合うことから始めて、馬場町長の言葉通り『身の丈にあった交流』を続けたい」との話がありました。

「農業開拓」が結んだ絆

開設のため自宅を提供されました。このように、地域の発展に身を惜しまず尽力した人物として、斜里の開拓の歴史に名をとどめています。

また、住田町多田町長からは「東日本大震災で近隣の市町村だけではなく、広域で連携し合うことの大切さを実感した。『力強い友人』ができたとして捉えていただけたらと思う。まずは災害時に助け合うことから始めて、馬場町長の言葉通り『身の丈にあった交流』を続けたい」との話がありました。

「身の丈にあった交流を末永く」

災害時における相互応援に関する協定を締結

岩手県 住田町との新たな絆

6月29日、岩手県住田町と斜里町の「災害時における相互応援に関する協定」の締結式が斜里町役場 応接室で行われました。住田町の多田 欣一町長、菊池 孝議長ら4名が来町したこの日、住田町と斜里町との間に新たな絆が生まれました。



写真：協定締結式において
右から住田町より菊池議長、多田町長。斜里町より馬場町長、木村議長。

岩手県の南東部にある豊かな水と緑の町



住田町は、岩手県の南東部に位置する人口5,717人（平成29年6月末現在）の町です。隣接する大船渡市や陸前高田市とともに「気仙地方」と呼ばれています。

海洋性気候の影響を受け、冬でも比較的暖かく雪も少なく過ごしやすい地域です。東に県立自然公園「五葉山」、西には宮沢賢治の童話「風の又三郎」の舞台となった「種山ヶ原」を望み、町の中央にはアユやヤマメなどの淡水魚の宝庫である清流「気仙川」が流れるなど豊かな水と緑に囲まれています。

森林・林業 日本一のまちづくり



スギ林が並ぶ住田町の森



日本初の木造仮設住宅

住田町は町の総面積の90%が森林です。平成16年に「森林・林業 日本一のまちづくり」を打ち出し、苗木生産から家の建設までの流れがすべて住田町で行われる「住田型森林業システム」と呼ばれるサイクルを構築しました。そのシステムが発揮され、東日本大震災の際に日本初の「木造仮設住宅」を建設し、大きな被害のあった陸前高田市などの近隣自治体の被災者をいち早く受け入れました。

林業だけではなく教育の分野など、住田町の日々の暮らしに木が根付いています。

住田町観光協会
PRキャラクター
「あみっこ」

住田町って
こんな町!